御裝束　其日平旦、掃部寮女官上紫宸殿御格子、懸御帳、帷、壁代、冬旬用之

〔江家次第十七〕御元服

南殿母屋九間懸壁代

〔禁腋秘抄〕夜ノヲトヾハ、御帳、日ノ御座ノ如シ、壁代懸タリ、

〔大鏡七太政大臣道長〕西宮殿も、十五の宮もかくれさせ給ひにし後に、故女院の后におはしましゝおり、この姫君をむかへとりたてまつらせ給ひて、東三條殿の東對に帳をたてゝ、かべしろをひき、わが御玄つらひにいさゝかおとさせ給はず、〇略下

〔河海抄一桐壺〕とむじきろくのからひつ　屯食事、延長七年二月十六日、當代源氏二人元服、垂母屋壁代、撤畫御座、其所立倚子爲御座、孫庇第二間有引入左右大臣座、〇略下

〔大饗御裝束間事〕康平八五廿八記云、〇略中六月三日、大饗也、土御門高倉亭寢殿南廂西五間、西庇二間、幷上下鴨柯間垂簾、內懸四尺几帳帷、或說、母屋懸夏壁代云々、雖號壁代、實是帳帷云々、

同〇永保三年正月廿三日、六條右府記云、〇略中廿六日、任右大臣大饗也、於三條殿設之、其儀、寢殿母屋南面東五間東面三間、度々例用二間、而今度依座狹用三間、幷南北西鴨枝東庇北鴨枝障子上懸簾、內懸壁代、但上下鴨枝內懸几帳帷、

〔永昌記〕長治二年正月十四日癸未、臨晚藏人文章生廣房奉仕御裝束、依有內論義也、其儀上御殿南格子等、撤日記御厨子、南壁代不撤也、卷上、在格子上、

〔長秋記〕大治四年正月一日庚辰、新中納言云、攝政供御祝、退下時、帳臺退行、右廻起座給、左肩當壁代程也、

〔三長記〕建永元年十一月十五日、召修理大夫給宣命、次召予、〇藤原長兼予立ザマニ微唯一揖、左廻參進、立母屋際壁代內程向北一揖、

〔正中御飾記〕次壁代、生絹帳貳條、先以陸丈壁代絹、自東乃南脇始天奉仕也、自上迄下一通爾、肱金五